

◆ エルガー／「子供の魔法の杖」第1組曲

この曲の題材は、エルガーが11歳の頃、兄弟・姉妹たちと一緒に演じた劇のために作曲した音楽から採られている。劇の内容は、「子供たちから『魔法の杖』をもらった2人の大人（両親）が妖精の国で遊ぶ」という実に微笑ましいものであった。

後年、『エニグマ』『威風堂々』などによって国際的な名声を獲得したエルガーは、50歳の誕生日に際し、古いスケッチ帳からこの可愛い作品を見つけ、2つの管弦楽組曲に編曲した。現存するエルガー最初の作品であり、作品番号「1」（組曲それぞれが1Aと1B）が与えられている。

第1組曲は「序曲」「セレナード」「メヌエット」「太陽の踊り」「妖精の笛吹き」「まどろみの情景」「妖精と巨人」の7曲から構成されている。子供たちのウキウキした心情が溢れた「序曲」で組曲の幕が開く。続く「セレナード」では弦楽とハーブに導かれ、かわいらしいクラリネットの旋律が妖精の国へと手招きする。いかにも古風な「メヌエット」で大人が登場すると、元気いっぱい「太陽の踊り」を踊る。穏やかにたゆたうような2本の笛（クラリネット）が美しく響く「妖精の笛吹き（pipers）」が「まどろみの情景」を誘う。終曲の「妖精と巨人」では、高音楽器群による妖精と低音楽器群によるグロテスクな巨人との対比がなされ、力強く曲が閉じられる。

余談になるが、欧州では人生のひとつの節目として、50歳の誕生日（Half Century）が大切にされ、盛大な祝賀会が開かれるという（日本における「還暦祝い」に近い？）。シベリウスの第5交響曲にも関連するが、これを契機に書かれた作品を探してみるのも面白いかもしれない。
(Sherry Silver)

◆ ヴォーン＝ウィリアムズ／交響曲第5番 ニ長調

皆さんは、イギリスのオーケストラ曲を“生で”体感したことがどのくらいおありだろうか？

イギリスのオーケストラ曲の中に身を置くと、その響きの心地よさにまず驚かされる。ドイツやイタリアの音楽にはない響きが確かにそこにはある。“ドイツ音楽は構成を大切に、内容を主張する。イタリアの音楽では歌手の声を聴かせる。それに対し、イギリスの音楽は響きを聴かせる”と寺岡氏は語る。“ドイツ人はイギリスの曲をなかなか受け入れることができない。クライマックスがあるようなないようなで耐えられない。だが、われわれ日本人は能になじんでいるように、内面をしみじみと伝えるようなイギリスの音楽を受け入れる素養があるのではないか？”とも寺岡氏。今宵、皆さんにも、イギリス音楽の“響き”と“内面性”をぜひ感じていただきたい。

ヴォーン＝ウィリアムズは、イングランド南西部の都市、グロスターシャー生まれのイギリスの作曲家である。生誕1872年、没1958年。ホルストの2歳先輩になる。ロンドンの王立音楽大学でホルストと知り合い、一緒に民謡を集めたりした。マックス・ブルッフやラヴェルなどにも師事している。交響曲は9つ書いており、5番以降は70歳を過ぎてからの完成である。交響曲第5番は、1943年に完成。彼の交響曲の中では最も編成が小さく、内面的な表現が一層際立っている。宗教書をもとにしたオペラ『The Pilgrim's Progress』『天路歷程』からの動機や主題が多く用いられており、第2次世界大戦中の人類への祈りをも感じさせる。ヴォーン＝ウィリアムズはシベリウスを尊敬していたとのことで、この交響曲第5番には「シベリウスに献呈する」(Dedicated without permission to Jean Sibelius) と記されている。

第1楽章 プレリユード Moderato ニ長調、4/4拍子、ソナタ形式

ニ長調を基調としているが、冒頭、チェロとコントラバスの低い“ハ音”が持続的に鳴る中に、ホルンによるニ長調の付点リズムが現れ、独特の響きをつくっている。次いで民謡調のヴァイオリンによる第1主題が奏でられる。冒頭の付点リズムの動機は、上昇と下降を続けながら、また調性を変化させながら繰り返し現れ、人間の生命、脈々とした命の鼓動を感じさせる。この動機は第4楽章で回帰する。

第2楽章 スケルツォ Presto misterioso イ短調、3/4拍子

ギャロップダンスのような曲で始まり、テンポ感のある楽章である。ヘミオラ（3拍子の曲で、2小節をまとめてそれを3つの拍に分け、大きな3拍子のようにすること）のリズムがスパイスとなっている。終盤、ブラスの響きで高揚し、クライマックスの後、洒落っ気のある弦の掛け合いで終わる。

第3楽章 ロマンツァ Lento 3/4拍子

何とも美しい緩徐楽章。弱音器をつけた弦の和音の移ろいで始まり、祈りにも似た響きの中、イングリッシュホルンによるソロが奏でられる。このソロは、前出のオペラ『天路歷程』（第1幕 Scene 2）からの巡礼者の歌である。その歌詞には、“He hath given me rest by his sorrow, and life by his death”（彼は私に、彼の悲しみによって安息を、彼の死によって命を賜った）と刻まれている。

第4楽章 パッサカリア Moderato ニ長調、3/4拍子

チェロのパスサカリアの主題から始まるが、この主題も『天路歷程』による。さらに、中間のブラスのファンファーレも『天路歷程』からで、“巡礼者の武装”シーンからとってきたものである。終結部は誠にすばらしい。第1楽章の主題に回帰し、回想と祈りの中で曲は閉じていく。最後にいろいろな楽器から聞こえてくる上昇音階は、天国への階段をゆっくり登っている情景を思い浮かべさせる。
(Cl. Hiro)

◆ シベリウス／交響曲第5番 変ホ長調

「陽はくすみ、冷たい。しかし春はだんだん近づいてくる。今日は16羽の白鳥を見た。神よ！何という美しさか。白鳥は私の頭上を旋回して、くすんだ太陽の光の中に消えていった。自然の神秘と生の憂愁、これが第5交響曲のテーマなのだ」

この第5交響曲は1914年の秋に着想された。翌1915年12月8日、シベリウス50歳の誕生日に行われた記念祝賀会において初演され、大成功を収めた。しかしシベリウスはこれに満足せず、1916年秋に最初の改訂を、さらに1917年に再改訂を行った。この第2改訂稿は1919年秋に完成し、ヘルシンキにおいて作曲家自身の指揮により演奏された。結局、これが最終稿となっている。

第1楽章 テンポ・モルト・モデラートーアレグロ・モデラート

前半＝ソナタ形式の「テンポ・モルト・モデラート」と、後半＝スケルツォ風の「アレグロ・モデラート」からなり、初稿ではそれぞれ別の楽章だったものが、改訂の段階で融合されている（そのためか練習番号A, B, …が2回ずつ出てくる）。最終的に単一楽章となった交響曲第7番への先駆的試みとも言えるだろう。

冒頭、北欧の大地を思わせる伸びやかなホルンの問いかけに木管楽器が応えて主題が提示される。第2主題は「ややフルート風に」と示された弦楽器のトレモロに乗った木管によって奏される。展開部ではクラリネットを伴ったファゴットの吹き（やがて独白となる）が印象的である。ホルンの二度にわたる咆哮に導かれた管楽器が不安な響きを斉奏すると、視界が徐々に開けていくかのように長調に転じ、再現部へとなだれ込む。爽快感を伴ったままアレグロ・モデラートへと推移するさまは圧巻である。スケルツォ主題は木管により演奏される牧歌的なものだが、第1主題も交えて発展していく。中間主題（事実上のトリオ）はトランペットにより提示され、最後は熱狂的なコーダとなる。

第2楽章 アンダンテ・モッソ・クワジ・アレグレット

変奏曲形式による緩徐楽章。主題は弦のピツィカート、2本のフルートにより提示される素朴な歌であり、この主題がさまざまな楽器に引き継がれながら6回変奏されていく。哀愁漂う中にも慈しみに溢れた楽想が続く。最弱音の金管の和声に続くオーボエとヴァイオリンの対話は感動的ですからある。終盤では、ティンパニ、低弦によって第3楽章の主題が準備される。

第3楽章 アレグロ・モルト

フルート、ファゴット、ティンパニと、第2ヴァイオリンを従えたヴィオラによって展開部的に開始され、次いで低弦による第1主題の断片が奏される。二対のホルンが鐘の響きを思わせる第1主題を示し、低弦による拡大形と組み合わせられていく。牧歌的な第2主題はフルート、オーボエとチェロによって表情豊かに歌われる。弦楽器のトレモロによる「ミステリオーソ（神秘的に）」を経て、「ウン・ボッケッティーノ・ラルガメンテ（幾分幅広く）」へ移行する。第2主題は弦に受け継がれ、管楽器による第1主題を交えてさらに強調されながら、次第に低音域へと沈み込んでいく。「ラルガメンテ・アッサイ（十分にたっぷり）」に到達すると、主題がまず霧の中から現れるように、やがて朗々と奏され、和音の6連打によって堂々と全曲が閉じられる。

現在、第5交響曲の初稿はオスモ＝ヴェンスカ指揮、ラハティ管弦楽団の録音（遺族によって特別に演奏が許された）でのみ聴くことができるが、壮年期のシベリウスを襲った病魔の影響か、不安な心情を吐露するような和声も散見される。二度の改訂を経た最終稿では、伸びやかで祝祭的な気分溢れた曲へと磨き上げられており、その対比も大いに興味深い。長寿だったシベリウスの創作意欲は晩年まで衰えることはなかったが、第7交響曲を発表して以降23年間、ついに交響曲を発表することはなかった。この第5交響曲、特に第1楽章を「自分の作品で最上のもののひとつ」と語っていたという。

(Tp. I. T.)